

自己の探究 （５）

和 田 渡

（f）否定的自己関係の諸相

自己関係が、とりわけアランに特徴的に見られるように、意志的な自己の改変を目指し、自己を自己以上のものにしようとする積極的な契機を含む場合は少なくない。森有正やリルケの思索においても、自己の経験を凝視しながら、自己の内部に逆行して自己を掘り下げ、深化させようとする傾向が顕著に認められる。モンテーニュの場合のように、自己に対する関係のなかに、自己を笑う、戯画化するという要素が含まれるとしても、自己を主題化しながら生きるという側面は、アランや森などと共通するものである。彼らには、自己をどのように考えるかは別にして、自己を執拗な思索の対象にするという仕方での自己関係を積極的に肯定する態度が認められる。

それに対して、自己を考えることから出発しつつも、最終的にはそれを自己の否定と、自己を自己以外のものに關係する態度へとつなげるのがパスカルの場合である。「人間を研究する者は、幾何学を研究する者よりもはるかに少ない⁽²⁾」と述べた彼は、自分自身の反

省や周囲の人間の觀察を通じて、人間認識を深めることに余念がなかった。しかし、結果的に、彼は人間の内にある種の偉大さを認めたものの、それ以上に人間が悲惨な状態にあることを自覚している。そして、悲惨さの原因のひとつを人間に巣くう根深い自己愛、つまり自己を優先させる傾向の内に見たパスカルは、自己愛の否定と真の幸福を可能にする宗教の次元を強調することになる。パスカルには、いわば自己と人間への思索の集中と、自己の否定と自己からの開放を主張する傾向が顕著なのである。その歩みは、自己嫌悪から自己否定、自己放棄を通じての信仰への帰依という図式に単純化することも可能であろうが、パスカルは、その移行の心理的プロセスをきわめて鮮烈な印象を与える思索的断章に書き留めており、その内容こそが今日でも検討に値するものとしてわれわれに残されているのである。以下では、『パンセ』に即しながら、パスカルにおける自己の問題を自己認識と自己否定という側面に關連づけて考察してみたい。

周知のように、パスカルはしばしばモンテーニュを批判している

が、その理由は、モンテーニュの自己関係のあり方が鼻持ちならぬいからである。パスカルによれば、「自分を描こうとする彼の愚かなる企て！」⁽³⁾としての『エッセー』は、自己の描写を主目的にした許し難いものである。パスカルには、それが数々の淫らな言葉や、人を信仰から遠ざける無価値な表現からなる書物に見え、⁽⁴⁾そのなかでモンテーニュが格好つけて自己を語りすぎるのが不快なのである。⁽⁵⁾真摯に自己に向き合うことにはおそらく異論を唱えないパスカルは、自己に対して余裕のある距離を維持しながら、自己をその滑稽な面や醜惡な面も含めて自由自在に描写するモンテーニュの態度が許せないのである。⁽⁶⁾（b）の冒頭でも述べたように、「世界で最大のことは自分自身を知ることである」という確信をもって自己描写を繰り広げたモンテーニュにとっては、自己同一性という皆に閉じ込めることも、自己という確固たる足場を築くことも問題ではなかった。刻々と変様する自己を眺め、自己と戯れ、自己を突き放し、突き崩し、自己を嘲笑し、多種多様な仕方で自己を料理することこそ、モンテーニュの望むことであつた。自分自身を知るためには、ひとつの観点だけから見ただけでは不十分であり、柔軟で多種多様な視点が必要である。また、自己において移行するもの、現れるもの、到来するものを丹念に追跡する眼差しも不可欠である。そしてなによりも、自己という生成する出来事ありのままに凝視しなければならぬ。自分の中の認めたくない傾向を無視する態度や、束の間の醜い心の動き、恥ずかしい振舞いを直視しない態度は、自己認識を妨げるのであり、情念による動揺や、欲望に翻弄され、うろたえ

る自己をも正確に把握するためには、清濁あわせ飲むような余裕が必要なのである。

モンテーニュに見られる、こうした類いの自己関係は、パスカルが得意とするものではない。「私は、モンテーニュにおいて見るすべてのことを、モンテーニュではなく私自身のうちに発見する」とパスカルが述べる時、彼は自分の内に、モンテーニュが描写したような諸傾向を認めていると見てよいであろう。しかし、パスカルはモンテーニュ的な仕方ですらについて語ることは愚かしいこととして斥けるのである。たしかに彼は、「自分自身を知らなければならぬ」という断章を残した。とは言え、それは自己の内部の醜惡さや、滑稽さや、恥辱を表にさらけだすことでもなければ、自己の内なる未知の部分の反省によって明らかにすることでもない。その後続く「自分を知ることとは真理を見出すことに役立たないとしても、少なくとも自分の生を規則づけることに役立つ、そしてこれほど正当のことではない」という一文が示すように、パスカルにとって、自分自身を知る目的のひとつは、自分の生に秩序を与えることにある。あるいは、カルロも適切に指摘しているように、⁽⁸⁾パスカルの強調する自己認識は、自分自身を知ることとよく考えることを結びつけたデカルト的な思索の文脈で捉えることも可能である。自分自身を知るとは、自分自身についてよく考えることにほかならないのである。「よく」というありふれた表現から何を汲み取るかは問題であるが、少なくともパスカルの場合には、よく考えるということ、自分で自分を正しいと考える方向に導くことと結びつけるのは間違

いではないだろう。生に秩序を与えるためには、思考による自己指導が不可欠だからである。したがって、自己を考える試みは、道德的色彩の濃いものになる。それを端的に示すのが、人間を一本の弱い葦にたとえた最も有名な断章三四七の後半の部分である。「だからわれわれのあらゆる尊厳は考えるということにある。われわれが立ち上がらなければならないのはそこからであって、われわれの満たすことのできない空間や時間からではない。だからよく考えることに努めよう。ここに道德の原理がある⁽⁹⁾。すなわち、パスカルにとっては、よく考えることこそがわれわれの尊厳の源泉であり、それはまたよく生きることでもある。それを首尾よく成し遂げられるとすれば、人間は偉大な存在たりうるはずである。

しかしながら、よく考えて生きることが望ましいものであるとしても、現実にはそれを貫くことは容易ではない。実際には、われわれはよく考えずに、情念にひきずられて悪く生きることの方が多いのである。こうした現実を直視したパスカルは、それゆえ、よく考える試みを、パスカル自身の生の秩序づけに関連づけることよりも、人間の現実においてはいかによく考えることが少ないかを描写することに直結させている。モンテーニュのように直截に自己を描くのではなく、自己の現実を人間の現実へと重ね合わせながら、両者の姿を観察し、書き留めることに注意を払うのである。こうした試みの背後には、言つまでもなく、自己を含めた人間の愚かしい現実と、神なき人間の悲惨さを指摘しながら、最終的に人間をキリスト教に導きたいというパスカルの戦略があることは言つまでもない。その

目標の達成のために、できるだけ詳細に自己と人間を研究すること、神なき人間の不幸を暴き出し、そうした人間に自己否定を促すような思索を繰り広げることに意が注がれたのである。この点を以下で検討してみよう。

先に述べたように、人間において、自分自身を知り、自分自身を正しい方向に導くこと、そのためによく考えることが可能であれば、人間は偉大な存在たりうるというのがパスカルの見解である。そのためには、自分から距離を取って、冷静に自己のありのままを凝視しなければならぬ。しかしながら、そうした自己客観化を通じて自己を批判し、自己の進むべき方向を絶えず修正しながら生きることは容易ではない。実際には、人間は自分との関係の姿を距離を取って眺めることよりも、その関係に拘束された状態で生きることには忙しいのである。すなわち、人間における自己との関係の質が疑問に付される以前に、その関係が人間を束縛しており、それを意識して対象化しない限り、人間は自己との関係に隷属して生きるほかはないのである。そうした状態の端的な現れとしてパスカルが例示するのが、人間の虚栄心である。自分のことを他人に自慢したり、他人から誉めてもらいたいといった、彼が断章一五〇で述べている虚栄心は、自己へと拘束された状態を意識することの少ない人間における素朴な自己中心性の現れである。⁽¹⁰⁾その素朴さに身を委ねる場合、自分を自分以上に見せようと自己を偽ったり、ことさらに自分のことを吹聴したり、他人の称賛を期待する言動に走ることになる。虚栄心の現れの背後に潜むのは、常に自分と他人の優劣を気にしなが

ら、自分の方を優位に保ちたい、それを他人に認知させたいという暗黙の自己愛的な心理であろう。そこに見られるのは、閉鎖的な自己関係がいびつな形で、あるいは滑稽な形で他人へと向かう傾向である。この関係の中心には、自分についてよく考える姿勢ではなく、ただ素朴な自己執着性と自愛が支配しているのみであり、自己のあり方に関心を払い、自己をよく配慮するといった態度は欠如している。

パスカルによれば、虚栄心の背後に潜む自愛は人間に深く根差している。「自愛とこの人間的な自己の本性は、自分のみを愛し、自分のことしか気につけないことである」⁽¹¹⁾。虚栄心が他人を前にしての、あるいは他人に対するある種の自己顕示欲の現れであるのに対して、自愛は、人間が端的に自己の存在維持と自己の利害関心の保持へと拘束されているという事実そのものである。「われわれの利害関心もまた、われわれにとつては、気持よくわれわれの眼をえぐる不思議な道具である」⁽¹²⁾。何よりも自分が可愛い、真つ先に自分の身が気にかかる、自分の存在を自分にとって快いものにしておきたいといった自己中心的な意識も自愛に特徴的なものである。自愛の念はまた、人間の行動のあらゆる場面で自己を優先させる傾向、そのために他人を蔑ろにしたり、排除したりする傾向にも結びつく。その場合、当然のことながら、自分の振舞いが他人にどのような波紋を投げかけているか、他人をどの程度まで不快にさせているかといった他人への配慮は欠けている。他人よりも可愛いのが自分であり、自分の利害を優先させるのが自愛に根強い傾向だからである。

四

したがって、自愛に拘束された人間は、自己中心的な圏内における快感の持続を妨げようとするすべてのものには敵対する。たとえば他人によつて自分の自己中心性や、それに伴う行動の醜さが批判されようものなら、自己愛に縛られた人間は、自分の言動を反省するよりも、そうした批判を不当だとして、他人を非難するのである。自愛と自己の現実の直視とは相容れることがないのだ。あるいは、パスカルが言うように、自愛は真実を嫌うのである。「真実を嫌うのにはさまざまな段階があるが、ある程度まですべての人が真実を嫌うと言える。なぜならばこの真実を嫌う心は自愛と不可分だからである」⁽¹³⁾。それゆえパスカルは、自愛に拘束された人間にたいする真の批判には、逆恨みを買わないような用心が必要だと述べるのだが、⁽¹⁴⁾自愛とは紛れもなく、人間が自己へと縛り付けられ、他人の言葉に開かれることのない閉塞的な状態なのである。

そうした素朴な仕方で自己に執着する態度は、言わば自己へと非反省的に没入しているものであり、自己に対して意識的に関係する態度ではない。したがってこの態度は、またしばしば、自己から逃走する方向へと反転することにもなる。それが明らかになるのが、パスカルの言う気晴らしの場合である。断章一三九に述べられているように、気晴らしとは、自分の部屋で休んで楽しめます、他人との談笑や楽しみを求めて外に出ていくことである。⁽¹⁵⁾言い換えれば、自己のもとにとどまり、自己の存在を静かに享受することは反対に、自己との対面を逃れて、喧噪の中に身を投ずることである。他人との噂話、陰口、世間話であれ、一人でできる賭け事や娯楽であれ、

「気晴らしや暇つぶしのためになされる行動は、「孤独のよろこび」⁽¹⁶⁾とは対極に位置する、自分について考えない行動の最たるものである。前者は、自分を考えるという困難を回避して、自分にとって最も容易なことにのめり込む行動である。仮に自分の部屋にとどまっても、そのなかでさまざまな娯楽に耽るとすれば、それもまた自己からの逃走にほかならない。気晴らしとは、自己へと関心を振り向けて内省に専念する孤独の時間を排除して、自分以外のものに没頭する自己忘却的態度であり、ひたすら自己から逃げることなのである。それによって、自己は問われるべき存在、考えられるべき存在という身分を失ってしまうのである。

以上に述べた素朴な自己執着からも、安易な自己逃避からも隠されてしまう人間の現実、それこそがパスカルの最も問題にするものである。人間の現実とは、われわれが真摯に自己に向き合う時に明らかになる人間のおかれた状況である。それに関連してパスカルは「人間がどこから来て、どこに行くのか」という問いを提出している。「人間は、彼が引き出されてきたところの虚無も、彼が飲み込まれたところの無限も等しく見ることができない」⁽¹⁷⁾。おのれの存在の始まりも終わりの終わることのできない存在、それが人間である。過去の記憶をたどり直しても、自己の誕生の起源には行き着かないし、自己の存在がどのように終わるのかも定かではない。われわれは誰一人として自分の存在を選び取ったのではなく、生きるとは自分が選択したのではないものに巻き込まれて生きるという側面をもつ。断章二〇五で述べられているように、自分が何故この場所に

てあの場所にはいないのか、自分が何故今存在していてあの時に存在していないのか、その理由はわからない⁽¹⁸⁾。そうした生の終わりもまた、何の理由もなく人間に予想外の仕方と与えられるものである。パスカルは言う。「ある数の人々が鎖につながれ、誰もが死の宣告を受けており、そのうちの何人かずつが毎日夜の前で絞め殺されていき、残りの人々は自分の身の上を同輩のうちに見て苦痛と絶望をもつてたがいに眺めながら自分の順番を待っているということ。それが人間の条件に関するイメージである」⁽¹⁹⁾。ここに示された死刑囚としての人間という周知の定義は正当であり、死の宣告は年齢や性別に関係なく不意に下される。しかしだからといって、パスカルが言うように、他人の死から自分の死を苦痛をもって待とうとする人間がいるかどうかは疑問である。いるとしてもごく少数であろう。次々と他人が死んでも自分は死なないと勝手に思いこんで、死を考えないようにするのが人の常ではないか。それゆえパスカルは、他方では次のようにも言うのである。「人々は死を、惨めさを、無知を癒すことができないので、自分を幸福にするために、それらのことを考えないようにした」⁽²⁰⁾。こつした対立する言い回しから明らかのように、パスカルは生の脆さに怯える人間と、その事実から目をそむけて気晴らしの生を生きる人間とを等しく視野に納めているのである。

パスカルが「死すべき存在としての人間」以上に強調するのが、「引き裂かれ、分裂した存在としての人間」である。それを端的に示すのが次の断章である。「理性と情念との間で行なわれる人間の

内部の戦い。もし人間が情念を持たず理性だけもっているとしたら：もし人間が理性を持たず情念だけをもっているとしたら：しかし人間はいずれをも持っているために、戦わずにはいられないし、一方と平和を保つには他方と争うことによつてのみである。かくして、人間は常に引き裂かれ、自己自身に対立しているのである⁽²¹⁾。人間を理性と情念の内戦状態にあると見るパスカルの認識は、おそらく否定できないであろう。なぜなら、自分に関する事柄において思い通りにならない、逆に思いがけないことをしてしまうといった一般的な傾向の内に認められるのは、まさしくわれわれの内に理性の働きを妨害する情念の力が働いて、内的な葛藤が生じてくるからである。情念が、飢えた身体がその飢えを満たそうとして意識に働きかける時に生ずる心の諸傾向であり、理性は身体から相対的に独立した自律的な傾向であるとしても、心身合一体としての人間は常に両者の攻めぎ合う場とならざるをえない。考える働きは、よく考えるという理性的な活動となつて現れる場合もあれば、身体的な欲望に支配されて、邪悪な考えへと導かれる場合もある。断章三六五にあるように、人間の尊厳が考えることの内にあり、思考はその本性からすれば驚嘆すべきものであるとしても、他方で思考は笑うべきものは他になほどの欠陥を持ち、低劣なものでもあるのだ。⁽²²⁾よく考える、正しく考えることに徹することができれば、人間は偉大になりうる。しかし実際には、それは例外的である。「人間は、人間の存在を形づくっている理性によつては少しも行動しない」⁽²³⁾。欲望の力に屈伏して、浅薄な思考に身を委ねる、衝動的な思考の虜になつ

て自分を忘れてしまふ、先のことを考えるだけの余裕を失つて、束の間の欲に駆られた思考に走るこの方が圧倒的に多いのが人間なのである。しかもこうした類いの思考は、慨して自分のなかでぐるを巻くだけでなく、その思考によつて他人を巻き込み、他人を自分の欲望を満たす手段にしてしまいかねない。理性的な自己制御を欠いた思考は、自己を損なうのみならず、他人をも引きずり込んで、一種の地獄を出現させるのである。

地獄とは、引き裂かれ、分裂した人間が繰り広げる舞台の別名である。理性と情念の内戦が続くその舞台では、理性によつて己れを制御できず、情念の働きによつて自分の予想だにしない方向へと引っぱられていく人間たちが、他人との間で心理戦や愛憎劇を繰り返す。その舞台ではまた、パスカルの言う「肉の欲、目の欲、生の奢り」⁽²⁴⁾が渦巻き、先に述べた人間の虚栄心や自愛も参加して、お互いの葛藤の炎を燃え上がらせる。何が起こるかかわからず、一瞬先も読めないのがその舞台の特徴であり、そこでは、「こんなはずでは、まさか」といった詠嘆が空しく響く。パスカルが目にしたのは、まさしく、予測不可能な出来事に巻き込まれて、崩れ落ち、呻吟し、苦悩する人間であり、他人を欺き、他人に欺かれ、脅しすかし、支配し、抹殺し、抹殺される人間の姿であつた。パスカルは言う。「人間は何という奇怪な獣であろうか。何という珍しいもの、何という妖怪、何という混沌、何という矛盾したもの、何という不思議なもの。あらゆるものの裁き手、か弱いみみず、真理の受託者、不確実と誤謬のごみすて場、宇宙の栄光にして屑」⁽²⁵⁾。人間が「奇怪な

獣「妖怪」の姿をみせるのは、言うまでもなく、自己へと意識的に関係せず直接性の次元で安定して生きる人間以外の多くの動物に比較して、人間がしばしば情念の誘惑に屈し、自己へと折れ曲がる一方で、他人に襲いかかる、陰湿に攻撃するといった傾向や、邪悪な意識のゆらぎに拘束されてさまざまな葛藤に落ち込む傾向を強く示し、結果として予想外の言動を繰り広げるような動物だからである。観察力、洞察力を働かせることの少ない人間同士の間では、相互の誤解や妄想に由来する喜劇や悲劇が演じられ、邪推や猜疑心に囚われやすい人間同士の間では、時に陰鬱なもつれが生じてくる。理性によつて自己を統御し、首尾一貫した行動をとる人は少なく、前言を翻し、矛盾した行動をとり、必要以上に自己を正当化し、他人を非難し、裁き、優位に立とうとする人の方が多い。しかしながら、そうした一種の奢りに染まり、強者として振舞う人間も、最終的には、自分では選ぶことのできない死によつてその命を絶たれる脆弱な存在にすぎない。あるいは圧倒的な自然の力の猛威に、一瞬にして掻き消されてしまう儚い存在にすぎない。とはいえ、そうした事実を意識することなく、まだまだ先があるという思い込みのなかで、心理的な争いに忙しいのが人間なのである。

以上述べたような、人間を「死すべき存在」と「引き裂かれた存在」という観点から捉えるパスカルの認識は、端的に言えば、人間の不幸と悲惨な状況を浮き彫りにするものである。しかし、人間が不幸な存在であり、惨めな状況に置かれているのは、不意の死によつて一方的に限界づけられ、理性と情念が内戦状態にあるという事

実だけによるものではない。それ以上に深刻な事態は、虚栄心に関連してすでに言及したように、なによりも自分を優先させ、自己中心的な発想から逃れられないという人間の傾向である。「誰もが自分をほかのすべての人々の上に置き、また自分自身の富、自分の幸福の持続、自分の生活を他のすべての人々のそれらよりも愛するとは、何という誤った判断！」⁽²⁶⁾ 他人の立場に身を置いて考え、他人を愛することよりも、自分の利害、関心を優先させるのがまず先なのである。また、自分の目線を疑い、吟味するどころか、偏見や先入見を含んだ自己中心的な視線で他人やものごとを見てしまうという傾向、自分の見解が自分で考えたものが、他人から強いられたものかを検討することなく、それを後生大事に抱え込んでしまう傾向が強いのも人間である。パスカルによれば、こうしたもつぱら自分自身の方へと収束する傾向の強い自己は厭うべきものである。⁽²⁷⁾ 彼はまた、断章四五五において、自己中心性の強さゆえに人間的自我は不正であり、さらに、他人に対しては自分に服従させずにはおかない横暴さのゆえに自我は不快であると断定している。⁽²⁸⁾ 実際に、過剰な自己愛は、他者の痛みへの非共感的な姿勢や、他者への横暴な振舞いとなって現れることも少なくないであろう。自分を優先させる態度は、しばしば他者への抑圧的な行為となって現れることも多い。そうした自己中心主義的な姿勢を拒絶することは困難である。パスカルがいみじくも指摘しているように、自己へと向かう傾向は生まれつきのものだからである。⁽²⁹⁾ それゆえに、人間の世界では、自己愛が邪欲や悪、無秩序と結びつく光景は終わることがないのである。

われわれは自己に執着し、我欲を満たすために他者を利用し、それが満たされない場合には他者を憎み、邪魔者扱いするような傾向へと本性的に拘束されているわけである。

このようにして、パスカルが暴き出すのは、死によって限界づけられ、理性と情念の内内戦状態の内に置かれ、自己へと拘束された悲惨で不幸な存在としての人間以外のなものでもない。パスカルが述べるように、こうした悲惨な状況や人間の愚かさを知ることができるという点において、人間はそのことを知りえないものに比べはるかに偉大な存在でありうるとはいえ、知ることによって人間の悲慘が消失することはない。死や自我の自己中心性は人間に深く根差しており、人間自身の力でそれを克服することはできないのである。人間には、自我の自己閉塞的な殻を打ち破って、その外へと出ることは難しいのである。とすれば、人間にはエゴとエゴが醜く対立する世界のなかで傷つき、不幸な状態に置かれる以外の可能性は残されていないのであろうか。答えは否である。それというのも、パスカルはエゴイズムによって自己へと閉ざされる人間に、人間とは異なる次元を対置することによって、人間の横暴さが否定される道が開かれると考えているからである。それを可能にするのが宗教の次元である。パスカルによれば、真の宗教は、われわれの勤めや、われわれの無力、高慢さや邪欲とそれらを癒す方法、へりくだること、節欲などを教えるものである。⁽³⁰⁾ その宗教の中心に位置づけられるのがイエスの存在である。周知のように、イエスが説いたのは、何にもまして人間の自己中心性、隣人よりも自分自身を愛す

る傾向の根深さ、物欲を始めとする人間の欲深さ、弱さ、罪、不幸であり、そうした傾向をもつ人間に対して彼が求めたのは、悔い改めであり、人間の創造主である神を愛することであった。パスカルが人間に求めるのは、自己へと閉じられた人間の悔い改めによる救済を説いたイエスの言動に注意を向けることであり、自分に対する関心を遮断することである。パスカルによれば、自分の存在に対する執着を絶つことこそが真の幸福にいたる道なのである。「イエス・キリストを知らなければ人間は不徳と悲慘のうちにいなければならない。イエス・キリストと共にある時、人間は不徳と悲慘をまぬがれる。われわれのあらゆる徳、あらゆる至福は彼においてある。彼を離ればただ不徳、悲慘、誤謬、暗黒、死、絶望のみがある」。⁽³¹⁾ パスカルの人間診断が明確に示されたこの断章において、重要なことは、われわれが自分と共に存在するのではなく、イエスと共に存在するというあり方を選択しない限り、悲慘な現実を免れることはできないということである。

パスカルはイエスの言動を知り、それを通じて示される神を愛する道を選ばない限り、人間に不幸と悲慘はつきまとうということを繰り返し述べる。逆に言えば、自分が高慢で不正な存在であり、邪欲に翻弄されてなにをしでかすかわからないという事実を直視するならば、それを回避する唯一の手段は宗教をおいてはないと強調するのである。とは言え、自己の愚劣さ、不徳への傾向、絶望的な惨めさの認識を起点とし、そうした傾向に拘束された自己執着性を否定する方向を選択し、そこから更に自己の存在の根拠が自分の内に

ではなく神の創造行為の内にあることを思い起こし、神への信仰を第一義とする道を選ぶことが誰にでも可能なわけではない。それが可能となるためには、自己の醜い現実を最終的には神なき自己の悲惨と見なす思索的徹底性が不可欠であり、それなくして自己愛の否定から神への愛という信仰的な転換を期待することはほとんどできないであろう。自己否定よりも、エゴイスティックな態度を優先させる多くの人間にとって、パスカルの提示する方向は、実現の可能性の薄い見取り図でしかないのである。彼が指摘するように、世間の人々の多くは、他の人々よりも自分を優位に置き、自分の財産や名誉を求めてやまない⁽³²⁾。彼らは、自己の不正、不義を自覚し、自己を厭うどころか、逆に年を重ねるとともに自己への執着の度合いを強めていくのであり、しかもそのことに気づくことが少ないのである。ラ・ロシュフコーが削除された箴言のなかで述べているように⁽³³⁾、その深淵の深さを測ることも、その深い闇を見通すこともできない自己愛は、人間を自己優先的な行動へ駆り立てるものであり、その力から自らを開放することは容易ではないのである。

とすれば、キリスト教オルガナイザーとして振舞うパスカルの残した断章は、多くの人間にとつては、顧みられることのない「幸福への処方箋」ではないということになる。実際に、健康への手引書を読んで健康になる人が多くはいないように、『パンセ』を読んで真の幸福をつかむ人の数も多いとは思えない。それというのも、そこにおいてパスカルが最初に強調している、情念と交戦するなかで、理性に依拠して「よく考える」こと、それを通じて自己を整え

る努力をすること、さらに自己のみじめさについても「よく考える」ことがそもそも困難である以上、「よく考える」ことを介してその先に開かれてくる信仰の次元に到達することなど至難の技だからである。したがって、思考を媒介とした自己関係性の地平から、自己否定を介して、自己を自己以外の存在に関係づける信仰の地平への転換を経験できる人間は、おそらく例外的な存在とみてよいだろう。だからといって、『パンセ』の幸福論の意義が失われるものではない。パスカルが提示した自己否定的思考のモデルが、悲劇的に引き裂かれた存在としての人間に、それを脱却するための道標となることは疑いえないからである。

注

- (1) 本稿は「自己の探究(4)」(『阪南論集 人文・自然科学編』第三六巻第二号、二〇〇〇年九月)に続くものである。
- (2) Pascal, *Pensées*, Édition Garnier, 1958, p. 115.
- (3) *Ibid.*, p. 83.
- (4) Cf. *ibid.*, p. 86.
- (5) Cf. *ibid.*, p. 86.
- (6) *Ibid.*, p. 86.
- (7) *Ibid.*, p. 86.
- (8) Cf. Vincent Carraud, *Pascal et la philosophie*, PUF, 1992, p. 287f.
- (9) Pascal, *op.cit.*, p. 163.
- (10) Cf. *ibid.*, p. 116.
- (11) *Ibid.*, p. 101.
- (12) *Ibid.*, p. 98.
- (13) *Ibid.*, p. 103.
- (14) Cf. *ibid.*, p. 103.
- (15) Cf. *ibid.*, p. 109ff.

(16) *Ibid.*, p. 110.
(17) *Ibid.*, p. 88.
(18) Cf. *ibid.*, p. 131.
(19) *Ibid.*, p. 130.
(20) *Ibid.*, p. 119.
(21) *Ibid.*, p. 173.
(22) Cf. *ibid.*, p. 165.
(23) *Ibid.*, p. 187.
(24) *Ibid.*, p. 191.
(25) *Ibid.*, p. 184.
(26) *Ibid.*, p. 191.
(27) Cf. *ibid.*, p. 190.
(28) Cf. *ibid.*, p. 191.
(29) Cf. *ibid.*, p. 195.
(30) Cf. *ibid.*, p. 198.
(31) *Ibid.*, p. 207.
(32) Cf. *ibid.*, p. 191.
(33) 『ラ・ロシュフコー箴言集』二宮ふさ訳、岩波文庫、一九八九年、一四七ページ参照。

(二〇〇〇年十二月十五日受理)